はしがき

神田外語大学大学院言語科学研究センター（CLS）の 2002 年度における研究活動の成果の一端として紀要の第２号を刊行できましたことを幸いに存じます。

本号には、理論言語学関係の論文６本と言語教育と関わる応用言語学関連の論文２本が収録されています。理論言語学関連では、動詞の意味と統語構造に関する論文を *Hasegawa* が状態変化動詞と位置変化動詞の構造の観点から、*Inoue* が様々な構文に見られる格と意味役割の関連性に注目してそれぞれまとめ、*岩本・上原* は概念意味論の立場から「ている」の意味解釈を考察し、*藤巻と山田* は各々日本語の「方」との複合、英語の-ing 名詞化を中心に動詞の項構造と形態のあり方を探り、*Ueda* はミニマリスト・プログラムの枠組みでの新しい数量詞解釈メカニズムを提案しました。応用言語学関連では、*Horiba* が第二言語としての日本語のテクスト読解に関する研究の動向についての研究報告を、*Kobayashi* がヨーロッパにおける国際科学教育プログラムの言語教育への波及効果についての研究報告をまとめました。

CLS は大学院での研究活動を積極的に支援していますが、2002 年度には、堀場裕紀江助教授を研究代表者（研究分担者：長谷川信子、井上和子；海外共同研究者：Michael Harrington (University of Queensland, Australia)）とした 2004 年度末までの３年に渡る研究プロジェクト『テクスト理解と学習 －テクストの言語の特徴が理解と記憶に与える効果について－』が日本学術振興会科学研究費助成金（基盤研究(B)；課題番号 14380119）を受け発足しました。その初年度における成果の一部は『科学研究費 2002 年度報告書』として別にまとめることができました。その報告書の目次は本号巻末に掲載されていますが、言語理論と学習理

論を横断的に考察し、言語現象においてもディスコース的要素も視野に入れ、言語理解と日本語教育、それに関わる実験結果の報告などが論文としてまとめられています。この報告書はご興味のある方には、部数の許す限り郵送料などの実費をご負担いただければお分けできますので、CLS へご連絡下さい。

また、通常の活動としては、井上和子 CLS 顧問による定期的な研究会があり、その成果の一部はやはり本号、および前述の科学研究費報告書の掲載論文としてまとめられました。また、国内外からの研究者を招聘したコロキアムを数回開催しましたが（巻末のコロキアム報告参照）、今年度は従来の研究発表にとどまらず、上記科研費関連のワークショップや、インフォーマルな討議を含めるとほぼ終日を費やしての講義なども開催し、内容の濃い研究会となりました。

研究員の山田昌史さん、事務担当の椎名千香子さんには、本号のとりまとめを含め CLS の研究活動全般に大いに尽力いただきました。感謝します。

2003 年 3 月

言語科学研究センター・センター長

長谷川 信子